

人形の遣ひ方とその組立

「人形」の組立つまでの、「人形」の細部の説明と、その遣ひ方を茲に説明しておきたい。

ところで、由來人形に關する参考書といふものが至つて少ないのです。普通手近にあるもので申し述べておくと、

享保十五年の「かろりくもんじやま璣訓蒙鑑草」二冊

「聲曲類纂」引用の原本「八重垣雲絶間」役者 一冊

「古今南水漫遊拾遺」二卷より三卷まで

弘化四年の「聲曲類纂」追補七冊

享和二年の「劇場樂屋圖繪拾遺」二冊

位が主なるものです。右の内「樂屋圖繪拾遺」に、私が茲に述べようとする「人形の細部」を「松好齋半兵衛」の繪筆によつて、可なり詳細に描かれてゐますから、一應参考にしていただきます。この「樂屋圖繪」は從來翻刻本がなかつたのを幸ひ私が「浪速叢書」第十五の卷「演藝篇」に収録しておきましたか

ら手輕るに活字本で今日では得られません。然れば、この「樂屋圖繪拾遺」に圖解されてゐるところは、茲では簡單に述べ「圖繪」にも、どの文獻にも見當らぬ點を十分に説明しておかうと、私は企てゝおきます。

元來「人形」を構成するには、左の部分から成つてゐます。

頭。 胴。 手。 足。

「頭」の分類は、——現在文樂座に現存してゐる「頭」の實物については、前項に説きました。そして組立に必要ですから、「頭」の柄のやうなところの術語は左の如くですから覺えておいて下さい。

「頭」のすぐ下なるが、——人間の頸に相當するところは、「咽首のどぐひ」といひます。この咽首を通じて眉目口を動かす機能の糸が付いてゐる「頭」の柄を「胴串」といひ「胴串」を「咽首」に挿込んであるところを、「カマ」といひます。

「胴串」の背後の溝に嵌込んだ、「ト」の字の形をした「頭」のうなづきを司る遊離したる栓を「引栓ひきせん」といひます。又目や口や眉を動かす作用の糸の栓をこぎるといつてゐます。「人形の分類」における寫眞のどれでもよろしい「胴串」の明瞭に寫眞に出てゐる分を参照して下さい。

序でに申しておきますが、人形遣ひの社會では、

目のことを「コツボリ」

眉のことを「アオチ」

口のことを「チク」

といふ隠語を用ひてゐます。「チク」は「クチ」の逆読みですが、「コツボリ」の眼に至つては、その隠語の意味は、今日では解らず傳ふるまゝに使つてゐます。

これらの「コツボリ」や「アオチ」の開閉の瓊は、「樂屋圖繪拾遺」に任せて、こゝでは説きません。

「胴」

胴は二つの種類があります。嚴密にいふと三つ或は四つです。即ち

丸胴。切胴。

この二つです。丸胴といふのは、相撲などの肌を抜く、或は裸身の胴で、はりもので胸も腹も背も拵らへてゐます。この丸胴の變形に腹や胸だけを見せる胴が「片羽權」といひます。が、大體の人形の胴は「切胴」と申してゐます。肩のところは一枚の板、腰のところは竹の輪、この板と竹とを繋ぐのが帳紙

の厚紙で、前掛のやうになつてゐます。この厚紙の前掛に人々の——即ち人形遣ひの名を書いて、ソノ切胸がだれの胸であるかを示してゐます。

舞臺に出れば魂が入り、戀もあれば無情もあらうといふ人形の胸——腹はうつろなものです。これは、吉田玉次郎の遣つてゐる切胸です。肩のところの一枚の板に、「頭」の「胴串」を挿込んである。だから人形の腹には戀も無情もない、「胴串」一本が、「頭」からぶらんこしてゐるといふだけです。されば人形の衣裳はこの肩の板にかゝつてゐるのです。この板は衣紋竹のやうなものです。人形の内部の下に見ゆる一本の太い竹は樂屋に人形が休んでゐるときの、支へ竹でこの竹の節の内へ胴串を挿して人形部屋に竝べてあるのです。

故に人形の胸で一等大切な役目を勤めてゐるのが、この肩の板です。これを「肩板かたいた」といつてゐます。この「肩板」に衣裳を着せたときに、衣裳がふつくらと肉の丸る味を保たすために、「肩板」には絲瓜を結びつけてゐます。そして「肩板」の中央は、四角に穴がある。そして肩板のこの四角の穴の四隅から紐が出て、「肩車」といふものを吊るしてゐます。遊離して吊るされてゐるのが「肩車」です。この「肩車」の中央に小さい圓形の穴があり、穴の前方に小ざる——小さい栓が付いてゐるのです。

この「肩車」の穴へ栓をはづして、「頭」の下方——「胴串」の上方の細くなつたところを、簾込んで栓

を閉ぢると、もう「頭」は金輪際落ちたり、抜けたりしません。

この「肩板」に遊離して四本の紐で吊るしてある「肩車」に「頭」が挿込まれてゐるのですから、人形遣ひが動かす「頭」に情が見えるのです。これは「肩車」を付けた「肩板」を上から見るとよく分ります。文字で説明すると、くどくどしくして、お解りかどうかを懸念しますが、實物を御覽になると、切嗣の大略が御解りにならうと思ひます。

この「肩板」は「肩車」を以て「頭」を支へるのみでなく、衣裳がこの「肩板」にかゝる。當にそれのみでなく、手と足とが皆「肩板」の兩端に紐でつるされてゐるのです。手と足とが肩板からぶら下る。この手の長い紐が「肩板」へ結へられてゐるのです。「肩板」の任や又重大なりと謂つべしです。

「手」と「足」とについては、別項の「人形芝居の研究」の一項に説明しましたから、茲には説明しません。この手の後ろに鯨骨の棒が術語でいふと「差金」といふので、この手の名稱は、「つかみ手」といふのです。

この「足」の、後に鍔形をしたる鐵のつかみが見えます。これは「足金」といつて足遣ひは、この「足金」を握つて、足を動かしてゐるのです。

これで「人形」を構成する細部について、大略述べましたが、この「人形」に衣裳を付けずに組立て、

見ると、變んな形になるのです。これに衣裳を付ければ舞臺へ立たせるのです。この裸身の人形を注視して下さい。そして再びこの組立つたこの人形から、足を除き、又左手を付けずに、人形遣ひに遣はした「人形」の構になると魂が入ります。

即ち、衣裳と足と左手とを除いて、その人形遣ひの両手の——両手とその指の配り方を見ると、人形はかうし遣ふものであるといふ事が明瞭に理解されると思ひます。千百の説明よりも、人形を見て貰ふと讀者は人形の胴の内部を説明して餘りあると存じます。

即ち人形遣ひの左手は、切胴の下の竹の輪の下部から、人形の胴内へ挿入されてゐます。この竹の輪を「胴輪」といひます。そして左手の四本の指と掌とで「胴串」を握り左手の拇指は「肩板」に紐で結へてある一本の「竹」を刎ねてゐるのです。この「竹」をこの道では「突あげ」と稱へてゐます。

左手の掌は「胴串」の一端をのせて、掌の廻はし方一つで「頭」に魂を吹込み「品」をつけるのです。又左手の四本の指は「胴串」に嵌まつてある「引栓」と、コッポリやチクを閉閉する小ざるを自由に操ります。そして拇指で刎ねてゐる「突あげ」は何の用をしてゐるかといふと、拇指で刎ねてゐるときは「突あげ」は遊んでゐます。が、「突あげ」の必要は「肩板」を自由に上下し、又「肩」に魂を吹込んで、「肩」に眼ほど物を言はすのです。別項の「人形芝居の研究」で述べました、「酒屋」のお園の「今頃は半七

さん」で、術ない女心を現はすのは、全く人形では、この肩の運動一つに懸るのです。その時こそ「突あげ」が必要なのです。

又私が、別項で、「人形の構へ」といふ事を、喧ましく詮義立をしましたが今一度「構へ」をこゝで説明することを許して戴けると、ハッキリと理解が出来るのです。

即ち、上方の本格的の人形では、人形遣ひの左手の前腕が殆んど直角をなしてゐる。——腕の折かゞみに胴輪を乗せて、胴内で前腕が直角だと前に申しましたのを、この「裸人形」の左手で見ると分る。腕を垂直にしての形をとつてゐるのが本格的の遣ひ方です。かうすると「人形」の全^{おも}重みが人形遣ひの左手の掌の一点にかゝります。そして垂直に曲げた二の腕で、人形の重みを堪へねばならぬのです。樂は出来ないが人形の姿勢がよろしい。これに反して江戸風の「鐵砲差し」になると、この胴内の左の前腕が前へ伸びます。だから二の腕で重みを堪へずに、樂ですが人形の姿勢が、前屈みにこゞみます。即ち人形の足は後へ引かれ「肩板」のところ、突出るから「頭」が、前のめりになるのです。されば江尻前の人形は、自然「頭」と「咽首」との角度で、前かゞみの悪姿勢を修正せねばならぬといふわけです。人形を御覽になるに、この裸身の遣ひ方を頭において、舞臺を見ると、人形遣ひの品位がよく分り

ます。

この裸人形で、尙説明を要するは、人形遣ひの右手です。これは手の品目からいふと「蜻つかみ」といふ手を使つてゐるのです。

ところで、この裸人形に衣裳を着せたところを示したのが、口繪の各圖です。——但し頭は違つてゐます。衣裳を付けるとこれだけ位が出来ます。即ち人形遣ひの左手は帯の下部に穴があつて、そこから手を突込んで、胴内の「胴串」を握るのです。すると、丁度胴輪が左手の腕の折れ屈みに當り、右手は袖のわき口から突込んで「蜻つかみ」の右手を遣つてゐるのです。

但し、この舞臺の人形で讀者の注意を喚起したいのは、前申した「突あげ」の一本の竹がこの時には、人形遣ひの右手の上につてゐます。——即ち「突あげ」が働いてゐるのです。裸身の遣ひ方だと母指で刎ねて、「突あげ」は遊離してゐますが、さうでないとは母指を竹から離すから、紐で結へた「突あげ」は、ブラリとする。これを右手の前腕に受けてグツと支へますから「肩板」に「突あげ」が働きかゝります。端的にいふと人形遣ひの巧拙の大部分は、この「突あげ」をうまく働かすか、死んで働かせないかに繫

つてゐるのです。「突あげ」をいなしたり、捉えたり活殺自由に用ゐる腕が人形遣ひの腕であるともいへます。

人形の遣ひ方に就いては、これ以上の説明は、もう筆では出来ないと思つて存じます。若い娘形の人形がよく引込みなどに品のある色氣のある科を見せますが、これはもう説明以外で、いはゞ一つに「胴串」を持つ掌の皮一枚の廻はし工合によるのです。「引栓」一つの引き工合で、うなづく頭に魂が入るのです。

丁度人間の生命のやうなもので、科學的に分析これ事としても、各元素の抽出は自由でせうが、各元素で構成された上での「生きた生命」の抽出は科學者のカテゴリーの外にあります。の如く、私が解剖していかに人形を談じても、人形の戀無情は、榮三、文五郎の「藝」にのみ生れます。こゝが「藝」の力で、されば人形を遣ふ説明は、これ以上は不可能ですから、もうやめます。

が、最後に人形遣ひについて申述べたい事は、昔は一生を「左手遣ひ」或は「足遣ひ」で終つた専門家が多かつた。即ち左手を遣ふばかり、或は舞臺を這つて足ばかりを一生遣つてゐたのです。が、今日では「道具調べ」「足遣ひ」「左手遣ひ」「人形遣ひ」——と、四つの階段になつてゐる。足遣ひや、左手を遣ふのは、人形を遣ふ修業の一つなのです。——これで果していゝだらうか、私は疑問に思ひます。早

い話が、俳優にもシテ役者とワキ役者とがある。ワキの名人必ずしもシテの名人ではありませんまい。昔から世が進むに従つて、職業が分業になつて行くのが、普通の傾向です。昔は足遣ひ、左手遣ひ、人形遣ひと専門になつてゐたのが、今日では専門的になつたといふのならば聞えるが、人形社會は逆轉の形勢を示してゐます。これでいふだらうか。と、疑問を私は打ちたい。

關西における能樂の鑑賞の大家として、私の尊敬する高安吸江博士が、この間かういふ話をしてゐられた。

梅若一派の「勸進帳」を観るに、辨慶が萬三郎で、富樫が六郎、定めて面白からうと思つたが事實はこれに反した。萬三郎も六郎もシテの能役者として立派なものだから一人がワキに廻つたらば嘸ぞよろしからうと思つたが、事實はさうでない。矢張ワキはワキ役者が勤めなくてはならぬ。——といふ意味の話を雑談のうちに聞いた。

私がいつも所作の舞臺で、ワキがシテを凌ぐやうな踊を見せてゐるのを、腕達者だと褒める輩のあるのを苦々しく思つてゐます。語り物、唄ひ物もさうで、この點になると最近では常磐津松尾太夫の二枚目を語つてゐました死んだ志津馬太夫は、どこまでも、二枚目語りの本分を忘れなかつたことを、今に思ひ

出します。

丁度人形も同じではないか、左手を手傳つてゐる人が、氣の無ささうな詰らなさうに遣つたり、ぞんざいな足遣ひを見るたびに、これらを修業の階段にせずして、それ／＼が専門であらねばならぬと、私はいつも考へさせられます。が、この實行案はなか／＼にむづかしいと思はれます。——例へば人形遣ひが出遣ひと稱して色のけばくしい、——人形の衣裳よりも、派手な社袴を着て出遣ひをやるのは考へものだと思ふが、出遣ひを廢止することは、なか／＼困難な事で、彼等の社會の心持を按ずると、或は實行の出來ない一片の空想に過ぎぬかも知れません。

ところが、人形の座頭吉田榮三が、この(昭和五年)四月興行から、樂屋に申合はせて、黒子の紐を、今日までは緋縮緬或は淡紅色、萌黄を用ひてゐたのを、一切廢止して黒子には黒の紐にしようと實行に取かゝつたさうです。私は榮三の案に雙手を舉げて賛成する。この色の紐は單なる舞臺の景容にすぎない。——人形遣ひの心持の景容です。そして舞臺に相當悪い効果を來たしてゐることが、往々にしてあつた。一體に黒子を着るのは、「黒」は「無」を表象してゐるといふ舞臺の約束に據るのでから、紐を黒にするのは最も合理的です。願はくば、今一番發して、色變りのけばくしい社袴だけは、人形の舞臺から去らしめたいものです。今一步です。人形部屋の努力に待ちたい。(昭和五年四月六日)